

# 伝統芸能

## 花はな鼓つづみ

今月は巡業公演で各地を廻っている。北国ではもう紅葉が鮮やかだ。

私の持ち場「御所桜畑川夜討・弁慶上使の段」は、一時間ほどの大役。弟義経の活躍に対する源頼朝の嫉妬を題材にした物語で、主人公は弁慶である。

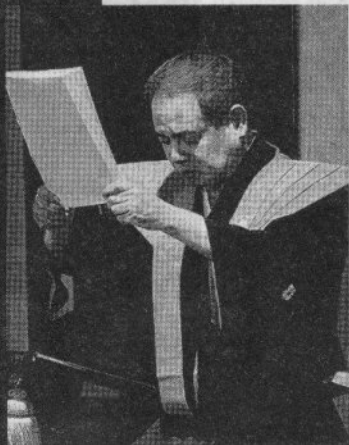
十八年前。互いの顔も定かでない暗い晩、弁慶

が生涯でたった一度契った相手、宿場の娘おわさ。生まれたのが、娘信夫。

そして今。信夫は自分が仕える義経の正妻卿の君の身代わりとして死なねばならない立場に追い込まれ、「父親を捜してからにして」という母おわさの懇願も空しく、哀れ刀で斬られるのだ。母は泣くやら気

文楽太夫

豊竹英大夫



豊竹英大夫 (撮影・小川知子)

## ヒエエ！ 弁慶様

は狂乱…。

斬ったのは弁慶。泣き叫び絶りつくおわさに弁慶は証拠の品(振袖)を見せつつ、「いつぞや播州福井村で、人目を忍びしばしの仮寝。さては汝であったよなあ…」と告白。

娘を斬ったのは、自分が契ったその人だった。ヒエエ！と、おわさはヒツクリ仰天。娘に「そなたの父御というは、弁慶様じゃ」と必死に呼びかける。

この瞬間、実の父に斬られ娘が瀕死のありさまという悲劇を瞬時忘れ、おわさは弁慶と契ったあの夜の自分を蘇らせているのだ。語っていてそう実感する。

もはや理屈でない。一瞬「女心」を高揚させているおわさが、このとき確かに私のなかにいるのである。

喜んで身代わりを熟望した信夫は達成感を伴い、浄土へ旅立つ。実の父が弁慶と気付かないまま…。